

会津開発地域

土地分類基本調査

糸 沢

5万分の1

国土調査

福島県

1981

会津開発地域

土地分類基本調査

糸 沢

5万分の1

国土調査

福島県

1981

序 文

会津地方は、国よりモデル定住圏地区として指定を受け、地域の特性を生かした豊かで住み良い環境づくりをめざし、あらゆる角度から検討され、いろいろな事業が実施されているところであります。

また、この地方は、昭和46年に国の新全国総合開発計画をうけ、「会津地域大規模林業圏開発計画」のプロジェクトを組み、会津地域の豊かな森林資源の高度利用を図るため、大規模林道の開発や造林、森林公園などレクリエーションエリアの整備等総合的な開発計画をたて、その計画が着々実施されております。

この土地分類基本調査は、これら計画の策定及び事業の実施をするうえでの基礎的な資料とするために、国土調査法第5条第4項による国土調査としての国の指定をうけて、地形、表層地質、土壌、土地利用現況などを総合的、科学的に調査するものであります。本年度は、5万分ノ1地形図「糸沢」図幅のうち、福島県の区域を調査し、ここに発行することになりました。本県では、この「糸沢」図幅のほか、昭和46年度「猪苗代湖」47年度「若松」50年度「喜多方」51年度「磐梯山」52年度「田島」53年度「宮下」54年度「針生」図幅の調査を完了しております。

この「糸沢」図幅の成果品とこれら完了した図幅で会津方部の中心的な部分はほぼ完了したことになり、昭和47年度に国土庁より発行された20万分の1「土地分類図」とともに活用されれば一層多面的に活用できるものと考えられます。

なお、この調査にあたり積極的に御協力をいただいた福島大学鈴木先生、中村先生はじめ諸先生方、調査地域の町村、県農業試験場、林業試験場及び関係機関各位に対し深く感謝の意を表する次第であります。

昭和 56 年 3 月

福島県農地林務部長

泉 敏 郎

調査担当者一覧表

地形分類調査
 福島大学教育学部教授 中村嘉男
 福島県会津若松市立謹教小学校教諭 田崎敬修

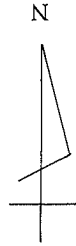
表層地質調査
 福島大学教育学部教授 鈴木敬治
 助教授 真鍋健一
 福島県立福島北高等学校教諭 吉田義

土 壤 調 査
 福島県農業試験場農芸化学部長 鈴木平喜
 主任研究員 菅野義忠
 福島県林業試験場主任研究員 荒井賛
 研究員 今井辰雄
 " 渡辺次郎

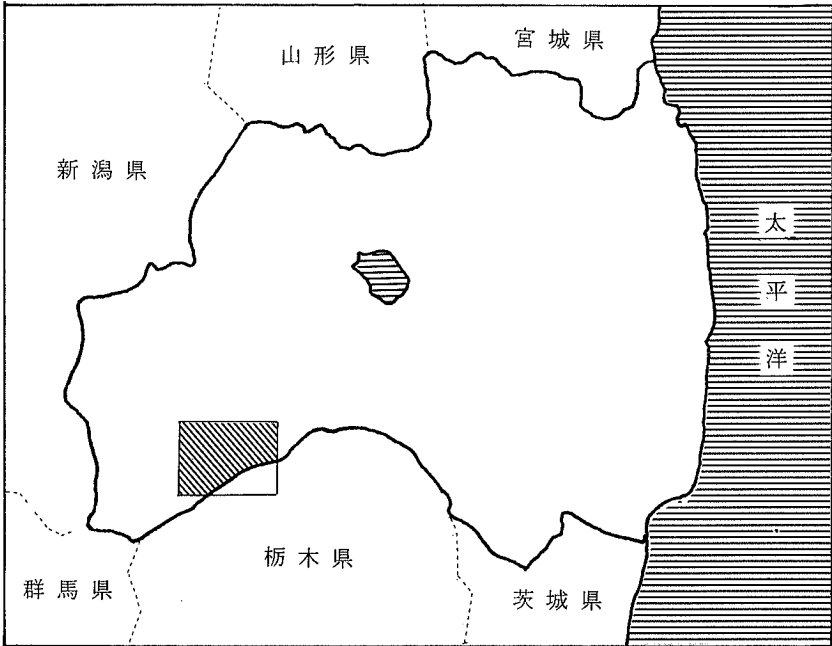
関 連 調 査
 傾斜区分調査
 水系・谷密度調査
 ・土壌生産力区分調査
 福島大学教育学部教授 中村嘉男
 福島県農業試験場農芸化学部長 鈴木平喜
 主任研究員 菅野義忠
 福島県林業試験場主任研究員 荒井賛
 研究員 今井辰雄
 土地利用現況調査
 福島県農地林務部農地計画課主事 高橋勝雄

目 次

総 論	1
各 論	21
I 地形分類図	21
II 表層地質図	26
III 土 壤 図	34
IV 傾斜区分図	41
V 水系・谷密度図	44
VI 土壤生産力区分図	47
VII 土地利用現況図	50



位 置 図



總

論

1 位置及び行政区画

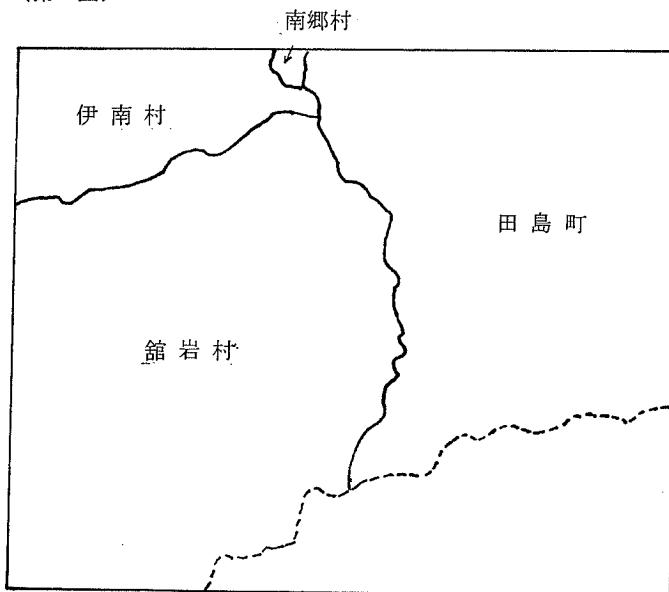
1. 位置

「糸沢」図葉は、県の西南部に位置し、図葉北東部にある七ヶ嶽と南部中央にある荒海山を軸とする地域で経緯度は東経 139度30分～ 139度45分、北緯37度～37度10分の範囲であり、調査区域は、そのうちの福島県の区域である。

2. 行政区画

この図葉の行政区画（第1図）は、南会津郡田島町、南郷村、伊南村、館岩村の4町村からなっており、本図葉内にしめる面積及び町村合併状況は第1表及び第2図のとおりである。

（第1図）



(第1表)

市 町 村 名	面 積	図 葉 内 に 占 め る 面 積	占 有 率	図 葉 内 旧 町 村 名
南 会 津 郡 田 島 町	351.90 ^{km²}	119.04 ^{km²}	33.83%	荒海村・檜沢村
〃 館岩村	263.65	188.28	71.41	館岩村
〃 伊南村	150.96	37.53	24.86	伊南村
〃 南郷村	119.86	0.72	6.01	大宮村
小 計	886.37	345.57	38.95	
栃 木 県	—	65.28	—	
合 計	—	410.85	—	

○田島町

昭和30年4月1日 荒海村、檜沢村を合併 (編入合併)

○館岩村 (変更なし)

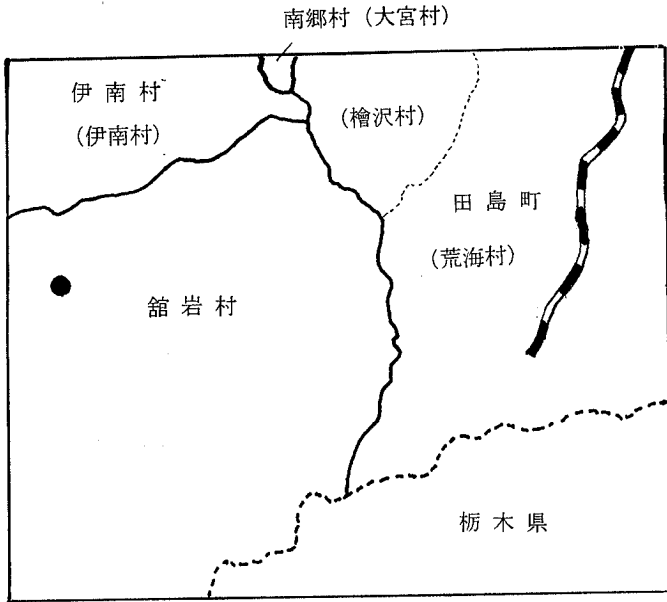
○伊南村

昭和30年4月1日 大川村と合併 (編入合併)

○南郷村

昭和30年7月20日 大宮村、富田村合併、南郷村となる。 (新設合併)

(第2図)



..... 県界 —— 町村界 - - - - - 旧町村界 ○ 町村役場所在地

2 人口動態

本図葉内の関係町村の世帯数及び人口の推移（昭和45年対比昭和54年）は第2表のとおりである。

この表でみると南郷村が4,791人が777人（16.2%）減って4,014人に、館岩村が世帯数には変動がないのに3,063人から457人（14.9%）減って2,606人となっている。その他の町村においても人口は7%程度の減少率を示しており、この図葉内の町村すべて過疎地域に指定されている。世帯数では田島町が増加傾向にありその他は変化なしか減少傾向にある。

この地域では、冬季間は積雪が多く土地条件も悪いので年々若年層が流出し、高齢化が進んでいる。とくに山間部では切実な問題になってきている。

昭和50年の15歳以上の産業別就業者数（第3表）をみると、昭和45年に対し、就業者数は、本図葉内の全町村が減少している。とくに第1次産業の減少が大きく、田島町で845人（26.3%）も減っており、館岩村230人（22.9%）伊南村206人（25.9%）南郷村226人（18%）の減少で平均22.8%の減少率を示している。これは、地域外に流出した者、第2次産業に従事する者が大巾に増加したことによるものと考えられる。第2次産業は、田島町で14.6%、伊南村で25.1%の増となっている。第3次産業は、全町村とも増加する傾向がみられる程度である。

(第2表) 世帯数及び現住人口

市 町 村	昭和45年 (10月1日)			昭和54年 (10月1日)			世帯数増減	人口増減
	世帯数	人		世帯数	人			
		合計	男		女	合計		
田 島 町	3,964	7,887	8,383	4,150	15,183	7,369	186	△ 1,087
箱 岩 村	750	1,468	1,595	752	2,606	1,255	2	△ 457
伊 南 村	653	1,335	1,354	638	2,479	1,233	△ 15	△ 210
南 郷 村	1,123	2,266	2,525	1,056	4,014	1,939	△ 67	△ 777

(国勢調査統計資料・福島県の人口)

(第3表) 産業別就業者数 (15歳以上)

市町村名	昭和45年				昭和50年				増減数				増減率							
	計	第一次産業	第二次産業	第三次産業	分類不能産業	計	第一次産業	第二次産業	第三次産業	分類不能産業	計	第一次産業	第二次産業	第三次産業	分類不能産業					
田島町	人 8,426	人 3,217	人 2,309	人 2,866	人 34	人 8,012	人 2,372	人 2,645	人 2,986	人 9	人 414	人 845	人 336	人 120	人 25	△ 4.9	△ 26.3	% 14.6	% 4.2	% 73.5
舘岩村	人 1,731	人 1,006	人 390	人 335	—	人 1,559	人 776	人 419	人 359	人 5	△ 172	△ 230	人 29	人 24	人 5	△ 9.9	△ 22.9	△ 7.4	—	—
伊南村	人 1,557	人 811	人 395	人 345	人 6	人 1,457	人 605	人 494	人 355	人 3	△ 100	△ 206	人 99	人 10	人 3	△ 6.4	△ 25.4	△ 25.1	△ 2.9	△ 0.5
南郷村	人 2,562	人 1,261	人 628	人 673	人 —	人 2,311	人 1,035	人 594	人 674	人 8	△ 251	△ 226	△ 34	人 1	人 8	△ 10.0	△ 18	△ 5.4	△ 0.1	—

(国勢調査統計資料)

3 地域の特徴

【地形的環境】

本図葉には、福島・栃木県境の帝釈山脈を南限とし、阿賀川（大川、上流部は荒海川）本流をほぼ東縁に、伊南川水系館岩川支流の湯ノ岐川を西縁にそれぞれ含み、北は「針生」図幅の駒止高原から続く石英安山岩質溶結凝灰岩の台地の一部までの範囲が含まれる。

山頂の高度分布をみると、最高峰は七ヶ岳ななつがだけ（1,635.8m）で、次いで大嵐山（1,635.4m）、荒海山（1,580.4m）、土倉山（1,559.8m）などが続く。全体として、1,100～1,300mの定高性を示す山稜がよく発達し、南会津山地に共通する滑らかな切峰面の一端を担っている。河川は阿賀川と館岩川（伊南川上流域の一部）の両水系からなり、山地を深く開析する一方で主要阿賀川沿いに巾200m程度の下位段丘を伴う。

注目されるのは館岩川上流部にひろがる高杖原地区で、土石流段丘などの緩斜面が数段に分かれてひろがっている。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）

【表層地質】

南会津地方の南端部をしめる本図葉域の北西部から南東部にかけての地域には、大滝沢層・鎌越沢層・伊予戸入層などの新第三紀の固結堆積物と矢竹沢層・滝ノ原溶結凝灰岩・七ヶ岳溶結凝灰岩などの新第三紀の火山性岩石とが発達分布している。伊予戸入層と七ヶ岳溶結凝灰岩をのぞく、新第三系はNW～SE方向の走向で、波曲しながら分布しているが、前2者は後者の新第三系をいちじるしい不整合関係でかさなっている。七ヶ岳溶結凝灰岩は1,200～1,600mの山地の山頂部を占めて発達するが、この山地の山腹は急斜面を有し、その山ろくの谷部には崖錐堆積物や土石流堆積物を発達させている。また、伊予戸入層は、後でのべる先第三系と新第三系との境界付近に生じた陥没性の小盆地に堆積したものである。

一方、本図葉の北西端部から南部にかけての地域には、古生代の固結堆積物とこれを買入する花崗岩質岩石などからなる先第三系が、かなり広い範囲を占めて分布する。

この地区の高所もこのような堆積物と岩石でしめられている。また、この地区の南西部や東部では、上述の先第三系を割って入る形で、矢竹沢層や水引層などの新第三系がN-Sに長軸を有する盆状構造をとって分布している。

先第三系と新第三系の境界付近は、N-S性やE-W性などの多数の断層の発達によって特徴づけられている。

本図葉の固結堆積物のうち、cstm（伊予戸入層）やcsm（水引層）などは、いくらか固結度が低く、礫岩質の堆積物が優勢な特徴を示している。七ヶ岳周辺の檜沢川上流・大川上流の各支谷・保城川流域などの谷部には、顕著に土石流堆積物（c11）や崖錐堆積物（cl）および段丘堆積物（gs・gsl（1）・gsl（2））などが発達している。また、伊南川・館岩川・湯ノ岐川・大川ぞいなどの谷には段丘堆積物が発達している。また、土石流堆積物や中・上位の段丘堆積物をおおって数m程度のローム（火山灰層）の発達がみとめられる特徴がある。

（福島大学教育学部教授 鈴木敬治）

【気候的環境】

谷底でもほぼ600m以上という山間地であるため、会津地方のうちでも冷涼な気候特性を示す。気象観測所は館岩（館岩村大字湯ノ花）と荒海（田島町大字糸沢）にあって、ともに1961～70年の観測値が記録されているが、ここでは前者を選んで転記する（第4表）。

まず月別平均気温をみると、1月の -4.0°C は、檜枝岐とともに県内最低値であり8月の 22.7°C も同様である。荒海での値もほぼこれに近い。降水量の月別平年値は、12月から翌年2月まで、1月の160mmをピークに120mm以上の降水（雪）があり、もうひとつのピークが7月（174mm）にある。つまり、いわゆる裏日本型の特徴が認められる。年降水量1,491mmは、県内ではやや多い方であるが、只見川沿いの各地に比べると若干少ない。

冬季間の寒気と多雪は各方面に厳しい条件を与えているが、一方では晴天の多い初夏と涼しい真夏は快適な季節となっている。

（福島大学教育学部教授 中村嘉男）

(第4表) 氣候表

釜岩氣象觀測所 (南会津郡岩村大字湯の化字下の原888—2 星 テル方)

項目	月												統計期間	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		年
平均	-4.0	-3.8	0.1	6.9	13.0	17.3	21.6	22.7	18.0	11.5	5.3	-0.6	9.0	1941~1970
最高平均	1.2	1.5	5.4	13.5	20.3	23.0	27.0	28.6	23.3	17.0	11.0	4.3	14.7	"
最低平均	-9.2	-9.2	-5.3	0.3	5.7	11.5	16.2	16.7	12.7	5.9	-0.5	-5.5	3.3	"
最高極	12.7	15.0	18.8	28.1	31.5	31.4	35.6	35.6	34.1	28.0	23.4	17.0	35.6	1939~1970
起年日	昭29.13	昭33.23	昭42.27 昭42.31	昭44.10	昭44.10	昭46.25	昭48.17	昭49.4	昭49.8	昭51.1	昭51.7	昭52.13	昭56.7.17 昭57.8.4	"
最低極	-25.2	-25.6	-21.5	-12.5	-6.6	1.7	5.4	4.2	1.0	-6.3	-11.7	-19.8	-25.6	"
起年日	昭38.23	昭47.11	昭48.2	昭49.17	昭49.15	昭43.1	昭42.1	昭43.20	昭43.20 昭45.24	昭46.22	昭41.23	昭46.31	昭47.2.11	"
日最高 $\geq 25^{\circ}$	0	0	0	1	6	10	22	29	11	0	0	0	79	1961~1970
日最低 $> 0^{\circ}$	31	27	28	12	4	0	0	0	0	3	16	29	150	"
合計	160	122	97	70	49	133	174	151	156	119	96	144	1,491	1941~1970
日量最大	83	44	67	74	83	103	125	221	175	141	80	133	221	1924~1970
起年日	昭45.30	昭41.5 昭45.9	昭31.19	昭25.1	昭4.23	昭41.28	昭46.22	昭24.31	昭22.15	昭19.7	昭7.14	昭2.13	昭24.8.31	"
日 ≥ 1	21	17	15	9	11	14	15	12	13	13	13	16	169	1961~1970
日 ≥ 10	6	5	3	2	2	5	6	5	5	3	3	5	50	"
日 ≥ 30	1	1	0	0	0	1	1	1	1	1	1	1	9	"
平均風速 m/S	1.1	1.4	1.6	1.8	1.4	1.0	0.9	0.9	1.0	0.9	1.0	1.0	1.2	"
最深積雪平均														
最深積雪極	236	257	204	160	4	—	—	—	—	—	—	130	196	257
起年日	昭11.31	昭13.20	昭15.4.9 昭13.1	昭11.1	昭22.3	—	—	—	—	—	—	昭26.28	昭2.30	昭13.2.20
雪日数														
日照時數	142	173	227	236	252	219	224	232	179	148	123	124	2,279	1961~1970

日本氣象協會福島支部 (1974) : 「福島県の氣候」による。

4 主要産業の概要

(1) 農業

本県図葉内の町村の専業・兼業別農家数及び世帯員数（昭和45年対比昭和50年）は第5表のとおりである。

総農家数では、全町村が減少しており、旧町村でみると田島町旧荒海村が29戸（5.4%）、館岩村が22戸（4.5%）減少しており、ほかも同様の減少率を示し、世帯員数も田島町旧荒海村で353人、館岩村で345人減り、それぞれ12.9%、15.3%減っており、本図葉全体で10%以上減少していることがわかる。

専業農家はいずれも減少し、田島町旧荒海村では48戸が20戸と大幅に減少しておりその他の地域も減少している。

第1種兼業農家は、田島町旧檜沢村で207戸が85戸に、旧荒海村が180戸から90戸に、館岩村が262戸から146戸と大巾に減少している。

第2種兼業農家は、年々増加し全農家戸数の50%以上を占めるようになった。

農家の男女別世帯員について1975年の農業センサスによれば、若干女が男を上まわっている。また、農業を主な仕事にしている人（基幹的農業従事者）についてみれば女が男を大巾に上まわっている。たとえば、田島町では、男が864人に対し、女が1,698人、館岩村は、男258人に対し、女が413人と女が男の約2倍となっている。年齢別に農家の世帯員数をみると、40歳～59歳までが29.08%～33.74%、0歳～19歳までが25.01%～30.13%、60歳以上が20.55%～23.33%、20歳～39歳までが、18.72%～20.28%となっており、60歳以上が、20歳～39歳よりも多い。また、40歳～59歳までが最も多く、中高年齢層といわれる部分が50%を超えている。

経営耕地面積（第6表）についてみると、本図葉内の地域は、山間地で山が急峻であり、耕地は、河川にそった平地及び高原にあるだけで面積はきわめて狭い。1戸当りの面積も県平均は112aであるのに対し、66a～79aであり、零細農業が多い。耕地面積に占める地目別の面積をみると田島町の旧檜沢村が、399haのうち田が336haで84.2%、旧荒海村が400haのうち田が226ha（56.5%）、畑が、135ha（56.5%）樹園地が39ha（33.8%）となっている。館岩村は、308haのうち、田が189ha（61.4

%)、畑が 101ha (32.8%) である。本図葉内では耕地の約60%~70%が田で、約30%が畑で、約10%以下が樹園地となっている。

水田は、阿賀川(大川)、荒海川、伊南川、湯ノ岐川、館岩川流域の平野部と高杖原に集中し、ほとんどがほ場整備を完了している。最近の主なほ場整備地区は、田島町藤生地区53.7ha、古今地区45.5ha、館岩村湯ノ岐地区10.8haとなっている。

畑は、田島町荒海地区、糸沢地区、川島地区、伊南村浜野地区、館岩村高杖原地区に分布し、なかでも田島町荒海地区では、たばこ、ばれいしょ、大豆、小豆が作られており、館岩村高杖原地区は戦後92haほど開拓された。集落附近に畑があり、たばこ大根、ばれいしょ、大豆、小豆、ソバ、リンドウなどが作られており、とくにばれいしょは、良質なものがとれるようである。伊南村浜野地区では、トマト、大根など野菜類が作られている。その他の畑では自家用野菜を中心にそばが多い。最近この地方でリンドウの栽培がさかんで、「尾瀬リンドウ」の名で中央の市場へ出荷されている。

養蚕は、田島町糸沢、滝の原、羽塩地区、伊南村浜野地区で飼育されている。

果樹は、田島町荒海地区の西沢口、沼尻でリンゴが植栽されている。以前はこの地区以外の川島、関本などでもリンゴが植栽されていたが、現在はわずか残っているだけである。

畜産は、高杖原に白樺牧場があり、肉用牛の肥育を行っている。牧草畑及び採草地は約 150haあり約 960頭の飼育を行っている。

また、この地方は、春は山菜、秋はきのこが豊富であり重要な収入源となっている。このような自然条件を生かした「なめこ」栽培などもさかんで「かんづめ」「ピンづめ」などの工場も多い。

(第6表) 経営耕地面積

市町村名 (旧町村名)	経営耕地面積 (昭和50年)				1戸当 面積	田率	樹園率	畑率
	計	田	遊園地	畑				
田島町	ha	ha	ha	ha	a	%	%	%
(檜沢村)	399	336	5	58	78	84.2	1.3	14.5
(荒海村)	400	226	39	135	79	56.5	9.8	33.8
館岩村	308	189	18	101	66	61.4	5.8	32.8
伊南村								
(伊南村)	222	167	21	34	65	75.2	9.5	15.3
南郷村								
(大宮村)	256	183	33	39	87	71.5	12.9	15.2

(農業センサス)

(2) 商 業

昭和51年度商業統計（第7表）によると、商店数は田島町が最も多く331店で、その他は100店から60店である。そのなかで小売業がいちばん多く約80%～90%である。飲食店は、田島町の63店（19.1%）が最高で、その他は10店以下である。従業者数は、田島町が1,038人、その他は250人以下と少ない。一店平均の従業者数は、田島町が3.1人、その他は、約2人となっており家内労働力だけで営業しているのが普通である。

年間販売額は、田島町が約76億円、南郷村17億円、その他は7億円ぐらいである。この凶葉の地域は、山間地で農林業が中心で人口も少ないので田島町を除いては、商業の発達する要素はきわめて少ない。魚類、日用雑貨や衣類等は他地域より行商に来る商人から購入している者が多く結びつきが深い。

(3) 工 業

昭和53年工業統計（第7表）によるとこの凶葉内に事業所のない南郷村を除くと田島町が102で最も多く、館岩村・伊南村とも20以下で少ない。従業者数でも田島町が1,632人、その他は200人以下で1事業所平均でも田島町は、16名で最も多く、その他は約11名となっている。

製造品出荷額は、田島町が85億5千万円、館岩村が約10億円、伊南村が3億6千万円となっており、1事業所当りでは、田島町が524万円、館岩村が546万円、伊南村が243万円となっている。

本凶葉内の主な事業所は、田島町糸沢地区に福島セコニック田島工場、徳力精工株式会社田島事業所、同町川島地区に丸新紡績株式会社、館岩村湯ノ花地区にパレル株式会社（縫製）などがある。

(第7表) 工業・商業統計表

区分	工業 (昭和53)			商業 (昭和51)					
	事業所数	従業者数 人	製造品 出荷額等 万円	総 数	卸売業 (4.2%) 14	小売業 (76.7%) 254	飲食店 (19.1%) 63	従業者数 人	年間販売額 万円
田島町	102	1,632	855,326	331				1,038	764,887
館岩村	17	182	99,488	65	(4.6%) 3	(80%) 52	(15.4%) 10	120	69,247
伊南村	14	150	36,507	60	—	(95%) 57	(5%) 3	127	65,947
南郷村	21	190	126,058	111	(3.6%) 4	(89.2%) 99	(7.2%) 8	245	177,109

(昭和51年度商業統計・昭和53年度工業統計)

5 開発の現況と方向

(1) 道路・鉄道

本図葉内の主要道路は国道 121号線が米沢から会津若松市・田島町の中心部を経て糸沢を通り山王峠を越えて栃木県藤原町・宇都宮市へ結んでいる。昭和55年6月に山王トンネルが開通し、曲りくねった峠道を通らなくとも良く、東京方面に行くのに以前より時間が短縮された。また、国道 352号線が田島町羽塩で、国道 121号線から分かれ、館岩村を横切り伊南村、檜枝岐村に通じている。この道路は、田島町、館岩村・檜枝岐村・尾瀬を結ぶ唯一の道路であり、夏は尾瀬、会津駒ヶ岳に登山する人々でにぎわう。中山峠の難所を起えてゆくので数年前までは冬季間は通行止になることがしばしばあったが、中山トンネルができ、新道が開通してからは、通行止にならなくなった。

主要地方道は、会津若松・伊南線が伊南川沿いに山口まで、そこから駒止峠を通過して会津若松市へと結んでいる。

館岩村松戸原から湯ノ花、水引を通るスーパー林道が栃木県栗山村に通じている。この道路は比較的良く夏には田代山の登山客が利用している。また、館岩村新田原から鱒沢川沿いに安ヶ森峠を越え栃木県の湯西川温泉に通じている林道がある。この林道は、峠附近の曲りがきつく急傾斜なので雨が降れば通行は不能になることが多い。

鉄道は、会津線が図葉北東部の国道 121号線に沿って、田島町滝の原まで通っており、この地方の交通・運輸の中心としての位置を占めている。現在この会津線と栃木県藤原町を結ぶ野岩羽線（会津滝の原駅—東部新藤原駅間31km）の工事が行われており開通が待たれている。開通すれば、東京方面からの観光客が大巾に増加することが予想され、この地方の期待は大きい。

(2) 水 資 源

本図葉内の一級河川は図葉北東、北西に阿賀野川上流の大川と只見川に合流する伊南川があり、大川には荒海川などが合流し、伊南川には、館岩川、湯ノ岐川、小滝川などが深い谷を流れる沢の水を集めて合流している。これらの河川は、農業用水に利用されているほか、アユを放流し観光用にも利用されている。

(3) 観 光

本図葉内には、館岩村の湯の岐川河岸に南会津西部で一番の温泉「湯の花温泉」がある。旅館8軒、民宿6軒、湯温60℃、単純泉の性質をもち、湯量豊富で、各部落（組）ごとに共同浴場を持っている。ここは、この地方の人たちの湯治場であり、いこいの場でもありとともに、観光シーズンの尾瀬への中継地として、また、田代山（1,926m）の登山基地としてハイカーたちが利用している。館岩川等に溪流釣やアユ釣に来る釣人たちの宿としても利用されている。

田島町には、福島県の野外教育施設が荒海地区にある。ここは前福島県会津経営伝習農場として農業後継者の育成のための教育施設だったところで、現在はキャンプ場やグラウンドになっている。附近には果樹園などもあり環境も良く夏休みには各地の子供会などがキャンプをしたり、若人たちの交流の場として利用されている。その上の原野は都立大の山の家建設予定地になっている。会津線の終点である会津滝ノ原駅前に滝ノ原温泉がある。荒海川の滝に接して旅館が1軒ありその上に老人保養センターがある。春は桜、秋は紅葉がすばらしく花見や紅葉狩りにおとずれる人が多い。この荒海川をさかのぼると銅鉱を採鉱していた八総鉱山跡がある。この鉱山は、江戸時代から採掘されていたが、本格的な採掘は、1949年（昭和24年）住友金属によって行われ、昭和40年に閉山した。当時は学校や映画館まであり、昭和35年に390世帯も生活を営んでいたが、現在は建物なども取り壊され当時の面影はない。残っているのは、小中学校の建物で、現在神奈川県の野外教育施設として利用されている。

この地方は豪雪地帯だが本格的なスキー場がなく、田島町、館岩村で建設にとりかかりつつある。館岩村では、昭和55年12月に高杖原に建設しているスキー場の一部をオープンした。このスキー場は現在ゲレンデ12.5ha、リフト2基、ロッジ1棟が完成しており、今後の計画では、昭和56年度は、第3、第4リフトの建設、57年度に第5リフトを建設し、あわせて、まわりの山林75ha、三角山、丸山に61haのコースゲレンデを造成する予定である。田島町では、七ヶ嶽・下嶽山麓にスキー場を建設するため現在調査中で針生、滝ノ原を結ぶ林道建設にあわせて開発する予定である。大規模スキー場が現在まで建設されなかった理由は、この地方の交通が不便で、スキー客の足が確保できず、受け入れ体制も十分でないためであった。しかし、関東方面から乗り

入れが便利になる野岩羽線の工事が順調に進む見とおしがついた現在、冬期間の現金収入の確保と南会津郡の発展のため、各町村で建設を急いでいる。

この図葉内の主な山岳は、次のとおりである。田島町中央にある七ヶ嶽（1,635m）下嶽（1,509m）は、登山道も整備されており登山者も多い。田島町、館岩村、栃木県境にある荒海山（1,580m）、館岩村にある大嵐山（1,635m）、土倉山（1,559m）などがあるが、これらの山は急峻であり登山道も整備されていないところが多く登山者は少ない。

また、中山峠附近に「沼の平」、黒岩山の山麓には「黒岩湿原」があり、まだ一般の観光客に知られない自然のままの湿原がある。

天然記念物は、館岩村の前沢部落にある「前沢の大杉」、県の重要文化財には、同村森林戸部落にある「虚空蔵堂鱒口」がある。

主な峠は、田島町と館岩村を結ぶ中山峠、南会津と首都圏を結ぶ山王峠がある。

民芸品としては、田島万古焼が田島町大字関本で作られている。主に茶器が多く「かえる」の装飾が特徴である。

(福島県農地林務部農地計画課主事 高橋勝雄)

(4) 開発の方向

本地域は、会津地域大規模林業圏開発事業の計画区域であり、林業を中心に関連産業を含めた地域の総合開発を計画している。

この地域の主なる開発計画は次のとおりである。

ア 広域林道ネットワークの整備

○ 大規模林道

飯豊・檜枝岐線 142.3km

区 間 名	延 長	林 道 通 過 市 町 村
田島・館岩	19.5km	田島町・館岩村

イ 大規模計画造林

田 島 町	1,703ha
館 岩 村	1,000ha
伊 南 村	78ha

ウ 特用樹林の造成（キリ・クリ・クルミ）

田 島 町	10ha	10ha
館 岩 村	6ha	
伊 南 村	6ha	

エ 蜜源林の造成（蜂蜜生産の源林造成）

田 島 町	6ha
館 岩 村	10ha
伊 南 村	32ha

オ 緑化木養成団地の整備（トチ、カツラ、コブシ、ナナカマド、ユズリハ、コメツガ等）

田 島 町	22ha	1 団地
館 岩 村	12ha	3 団地
伊 南 村	5ha	1 団地

カ 野生資源増殖団地の整備（山菜、木の実・なめこ・薬用草木）

田 島 町	4ha	1 団地
館 岩 村	560ha	6 団地
伊 南 村	36ha	2 団地

キ 森林レクリエーション、エリアの整備

七ヶ岳・黒岩地区

総面積10,008ha

関係市町村 田島町、伊南村、館岩村

施 設 交通施設、休養施設、衛生施設、管理施設、スポーツ施設

(福島県農地林務部林業指導課)

各 論

I 地形分類図

本図葉中の福島県域は、西3分の2ほどが伊南川（上流部の館岩川を含む）流域に残りの東3分の1が阿賀川（大川）流域にそれぞれ含まれる。全体として本県最南部の山地部にあたるため、最高点の七ヶ岳^{ななつがだけ}（1,635.8m）はじめ、荒海山（太郎山、1,580.4m）、大嵐山（1,635.4m）、真名板倉山（1,338.9m）など、1,500m前後の山々が連なり、これら山地を深く刻む河谷の谷底の最低点でも680mに達する。

地形分類にあたっては、山間部にあるという地域的特性により、狭小な河谷底にも河成段丘が多数段にわたって分布するので、それに注目して、とくに段丘の項を細かく分けた。また、地形地域の区分としては、図葉中央部の高杖原地区^{たかつえはら}を除くと、段丘・低地の分布は河川沿いのごく限られたところにしかみられないので、ほぼ河川の流域ごとに地形地域を設定し、比較的まとまりのある山地・台地のみをこれと別に独立の地形地域とみなした。

本地域における地形の成り立ちの特徴を端的に言えば、図葉域の大半を占める非火山性山地の侵蝕・開析という一般的過程に、七ヶ岳周辺の特異な崩壊・土石流地形がいろいろを添えていると見ることができる。

§ 1 地形の分類

(1) 山 地

大起伏山地……図葉城南西部、湯ノ岐川・鱒沢川・香屋川水系の支谷群が大嵐山・土倉山（1,559.8m）・黒峠山（1,315.7m）などの連なる山稜を深く刻む部分であり阿賀川と利根川の分水界にそびえる荒海山の周辺もこれに含まれる。

中起伏山地……図葉域中最も広く分布する。七ヶ岳付近を除いて、ほぼ標高1,200m前後の定高性山稜が谷密度20～25をもって開析されている。

小起伏山地……七ヶ岳北麓および東麓、高杖原周辺に分布する。いずれも切峰面高度が中起伏山地のところによりも200mほど低い。

山頂緩斜面・山腹緩斜面・山麓緩斜面……山頂緩斜面は、七ヶ岳溶結凝灰岩（柴田ほか1972）からなる台地の一部が侵蝕を免れている部分に多くみられる。真名板倉山の山頂部はこれと異なって、古い侵蝕平坦面の遺物と思われる。山腹緩斜面のうち、

いよと
伊与戸川左岸の標高 860～900mにひろがるものは、高杖原周辺の山麓緩斜面または上位土石流段丘とほぼ同じレベルにあり、高杖原台地の地形発達に関連して形成されたものようである。

(2) 丘陵地

小起伏地がある程度のひろがりをもって分布するという標式的な丘陵地は図葉内には存在せず、わずかに、低い丘の連なりが高杖原地区にいくつかみられるに過ぎない。その丘陵地も、成因的には、土石流段丘および中位砂礫段丘の埋め残し地形である。

(3) 台地

七ヶ岳周辺と、北部の黒岩山・黒岩湿原付近とに石英安山岩質溶結凝灰岩台地がひろがる。いずれも、七ヶ岳溶結凝灰岩の堆積面であるが、後者はさらに北に続いて、「針生」図幅の駒止高原をつくっている（中村・田崎1980）。駒止高原には標高 1,100 m前後の平坦面がよく保存されているのに対して、本図葉内においては著しく侵蝕されている。これは、本地域の台地面の標高が駒止高原よりも 300mほど高く、台地面形成後の隆起運動と、それに伴う斜面崩壊および侵蝕作用の活発化の結果かと思われる。

(4) 段丘

上位・中位土石流段丘……Y字型の平面形をもつ七ヶ岳の鋭い稜線直下には、急崖を伴った急斜面が延々と連なるが、この岩壁がつくられる過程で生産されたと思われる岩塊・岩屑がその周辺にみごとな土石流堆積地を形成している。そのうち、明瞭な段丘状の形態を示すものを土石流段丘と認定した。阿賀川左岸支流の鎌越沢・程窪沢・長沢・富貴沢ならびに館岩川上流高杖原などに分布する。ほとんど円磨されていない角礫～亜角礫からなり、地形面としてはほぼ上位ないし中位砂礫段丘に対比される。

上位～下位砂礫段丘……阿賀川流域と館岩川流域で若干様子が異なり、前者では上・中・下位の河成段丘面が狭小ながらも標式的に発達するのに対して、後者では、下位段丘のみが全般に広く分布するほか、上位・中位段丘は高杖原地区を除きその規模は極めて小さい。阿賀川沿いでは一般に段丘礫層はあまり円磨されておらず、厚さも 1～2 m程度である。段丘面の比高は滝ノ原付近で中位～下位が約 5 mであるほかは上位～中位、中位～下位とも一般に約 10mである。館岩川水系湯ノ岐川沿いには、上

～下あわせて6段の段丘面が認められ、湯ノ岐川の侵蝕過程が多彩であったことを物語っている。

(5) 低 地

扇状地……大規模なものはないが、小支谷の合流点付近に沖積錐に近い性質のものが多数分布する。半径 200～300mの扇形がきれいにできているほか、ほぼ共通して下位砂礫段丘面を覆っている。

谷底平野・河原・旧河道……主要河川沿いの谷底部はほとんどすべて段丘面となっており、谷底平野は図葉内の下流部にしかみられず標式的でないが、山地内にもところどころに細長く分布する。本来低地が狭いので、河原や旧河道の分布もごく限られている。

(6) そ の 他

とくに顕著なものは、七ヶ岳周辺に発達する急斜面・崩かい地形・崖・土石流地形等である。七ヶ岳～下岳の東西両側では、鎌越沢・程窪沢・長沢・富貴沢・赤芝沢・姥神沢の各沢沿いに押し出しがあり、新旧2つの土石流堆積物が識別される。古いものは基盤の凝灰岩などの岩塊を混え、上部に厚さそれぞれ30cmの2枚の軽石層をはさむ厚さ2m以上のローム層をのせている（鎌越沢、旧国道沿いの標高930m地点）。新时期のものは石英安山岩質溶結凝灰岩の岩塊と礫まじりロームなどからなり、程窪沢の標高830m地点では厚さ2mほどである。なお七ヶ岳～下岳稜線直下の急崖は比高100～150m、延長3.5kmに及ぶ大規模なものである。

§ 2 地形地域の区分と特色

A 分水山地 関東地方と東北地方とを分ける県境の山々は別として、図葉内の本県域を、いくつかの流域に分ける山地として次の4地域を設定した。

1a 黒岩山地 七ヶ岳から北西にのびる山稜が、保城峠(1,330m)から北で高まる部分にあたり、黒岩山(1,438m)を中心に石英安山岩質溶結凝灰岩の台地がひろがる。戸板峠(1,320m)をはさむ南北約3kmにわたって、西斜面が急な非対称山稜がみられる。

1b 牛首・真名板倉山地 黒岩山から西にはり出した支脈にあたり、牛首山(1,139.8m)・戸屋山(1,134m)などの、1,100～1,200mの定高性山稜が伊南川流

域内を伊南川右岸の小滝川・阿多根沢などの流域と、館岩川流域とを分けている。とくに南にはり出した稜線の一部に突出する真名板倉山(1,338.9m)の山頂には面積0.2km²ほどの平坦面が残されている。

Ic 七ヶ岳山地 七ヶ岳を主峰とする1,500～1,600mの定高性山稜が発達し、稜線直下に前述のような急崖が連なる。その上部は石英安山岩質溶結凝灰岩からなり縦方向の節理面に沿った崩壊によって急崖が形成されたものと思われる。Ia地区とは逆に、東側の阿賀川水系の河谷による侵蝕がかなり進んでいる。

Id 荒海山地 県境に屏風のように連なる1,300m級の稜線の一部で、主峰荒海山(1,580.4m)は前記Ia～Icとは異なって古生層(西斜面の一部は花崗岩)からなる。阿賀川(大川、荒海川)の源流がここに発している。

B 伊南川・館岩川流域

II 高杖原台地 館岩川上流部にあって周囲を1,300～1,600mの山々に囲まれた盆地状の凹地に、土石流段丘や砂礫段丘からなる数段の地形面がひろがる。構造性の凹陥地に、七ヶ岳周辺地域を供給源とする岩屑が少なくとも2回の土石流として押し出して堆積し、のちに館岩川の侵蝕復活に伴って段丘化した結果、全体として台地地域となったものと思われる。

IIIa 館岩川上・中流域 館岩川水系の主な支流の流域を除く部分をIIIaとした。上流部に高杖原のひろがりをもつほかは、中流部の流路沿いに下位砂礫段丘G tIII+・G tIIIがほぼ連続的に発達するのが特徴的である。

IIIb 番屋川流域 番屋の東側の露頭での観察によれば、中位砂礫段丘は経30cmほどの亜角礫を含む分級の悪い厚さ3m以上の砂礫層からなり、表層に薄く火山砂をのせている。一方、下位砂礫段丘G tIII+の構成礫は粒径がやや小さい(精舎付近)。

IIIc 樽沢川流域 館岩川への合流点から上流へ約10kmにわたってG tIII+ないしG tIIIが断続的に分布する。とくに小支谷との合流点付近にやや広く発達しているのがわかる。

III d 湯ノ岐川流域 湯ノ岐川に沿ってほぼ連続的にG tIII+が発達するが、湯ノ花付近ではG tI+以下G tIII+までの5段の段丘面が西から東に順序よく並んでおり、河道の東への遷移の様子をみごとに示している。なおこの部分では大がかりな耕地整

理が行なわれており、段丘地形は大巾に人工改変を受けつつある。

IIIe 伊南川流域 宮沢の東に伊南川の側方侵蝕による段丘崖（比高約8 m）が連なり、経7～8 cmの垂円礫を主とする分級のよい厚さ5 m以上のG tIII⁺構成層が観察される。伊南川の河床には、基盤岩の侵蝕で「河蝕台」がつくられている（中村1980）。

C 阿賀川流域

III f 阿賀川（荒海川）流域 本流に沿って一部にG t I、その他にはG t II、G t III⁺がよく発達する。左岸の諸支流沿いには前述の通り七ヶ岳東斜面特有の土石流地形（段丘）が分布し、急斜面のみの右岸地域と対照的である。

III g 檜沢川流域 七ヶ岳北斜面から針生方面に向って半円形に開いた谷で、土石流堆積面が広く認められるほか、谷底平野や下位段丘などは全く存在せず、もっぱら下方侵蝕の段階にある地域と言えよう。

参 考 文 献

柴田豊吉・増田孝一郎・村田正文ほか8名（1972）：糸沢地域の地質 福島県・福島県鉱産資源開発調査会

中村嘉男・田崎敬修（1980）：5万分の1地形図「針生」図幅地形分類図 福島県

中村嘉男（1980）：微地形的侵蝕景観の二、三の例について 福島大学論集 32
— 1、1—8頁

（注）地形分類図の作成ならびに説明書の執筆は、図葉内北東部、I a、I c、III f III gの範囲を田崎が担当し、その他の地域のすべておよび全体の調整を中村が担当した。また傾斜区分図、水系・谷密度図の作成にあたっては福島大学教育学部学生菅野美佐子、渡辺克行、橋本利浩、三浦浩の諸君の協力を得た。

（福島大学教育学部教授
中村嘉男
会津若松市立謹教小学校教諭
田崎敬修）

Ⅱ 表層地質図

本図葉では、その北半部の地域の大半を占めて新第三紀の固結堆積物と火山性岩石とが分布するが、南半部には古生層からなる固結堆積物や深成岩がおもに分布する。新第三紀の固結堆積物は固結した火山性岩石と密接にからみあいながら分布するが、固結堆積物のなかにも火山性の堆積物からなる地層がかなり多数狭在されているなど本地域の新第三系は火山性の堆積物が優勢である特徴を示している。また、cstm や csm などの新第三系の上部層は、固結度の弱い堆積物で、くずれやすい特異な性状を示している。

伊南川・館岩川・湯ノ岐川・大川・檜沢川などの水系の谷に未固結堆積物が分布している。とくに、保城川流域の高杖原付近・檜沢川上流の谷および大川上流から西方に入る支谷などの地域、すなわち七ヶ岳溶結凝灰岩の分布する山地の直下の谷部に崖錐性あるいは泥流性の堆積物が、ローム層(火山灰層)をとまないながら発達している。

本図葉の表層地質は、第1表に示したように、大区分で4、細分すると22になる。これらのうち、固結堆積物・火山性岩石・深成岩については、福島県地質調査報告「糸沢地域の地質」におうところが多い。

1. 未固結堆積物

伊南川・館岩川・湯ノ岐川・保城川・大川・檜沢川などの谷ぞいによく発達するほか、鱒沢川下流にも一部発達している。礫と砂からなる段丘堆積物は、下位 (gs)・中位 (gsl(1))・上位 (gsl(2)) に区分されるが、いずれも数m程度の厚さのところが多い、中位と上位の段丘堆積物の上には数m以下のローム(火山灰)をのせているところが多い。

とくに注目すべき堆積物としては、保城川流域の高杖原付近や檜沢川上流部(黒森沢・赤芝沢・姥神沢)および大川上流の支谷(鎌越沢・程窪沢・芳沢口西方)などに発達する碎屑物(泥流堆積物)とロームからなるc11がある。これらは、ほぼ上位段丘堆積物と形成時期を同じくするもので、とくに高杖原付近と檜沢川上流にその発達がいちじるしい。土石流堆積物は10~20mに、ロームは数m程度に発達している。また、鎌越沢・程窪沢・長沢・富貴沢の上流部には崖錐性の堆積物(c1)が発達する。

第1表 表層地質区分

大区分	小区分	区	分	堆積物・地層名	地質時代
未固結堆積物	砂・泥・泥炭 砂・泥・砂 礫 碎屑物 礫・砂・ローム(1) 礫・砂・ローム(2) 碎屑物・ローム		〔s・g〕 〔s・m・p〕 〔g・s〕 〔cl〕 〔gs・l(1)〕 〔gs・l(2)〕 〔cl・l〕	現河床および氾濫原堆積物	第四紀 完新世↘更新世
				氾濫原堆積物 下位段丘堆積物 崖錐堆積物 中位段丘堆積物 上位段丘堆積物 土石流堆積物	
固結堆積物	礫岩・礫質砂岩・凝灰岩・砂岩泥岩互層 礫岩・粗粒砂岩・砂質泥岩 凝灰岩質砂岩・礫岩凝灰角礫岩・凝灰岩 凝灰岩質粗粒砂岩・礫岩・火山礫凝灰岩・細粒凝灰岩〔tsc1〕 粘板岩・チャート類 硬砂岩類 石灰岩レンズ 角礫岩		〔cst m〕 〔csm〕 〔tsc b〕 〔tsc l〕 〔Sc〕 〔Gw〕 〔Ls〕 〔Tb〕	伊予戸入層	新第三紀 鮮新世↘中新世
				水引層 鎌越沢層 大滝沢層	
火山性堆積物	石英安山岩質溶結凝灰岩 石英安山岩質溶結凝灰岩 玄武岩質溶岩・凝灰角礫岩 凝灰角礫岩・角礫岩 流紋岩質岩石(流紋岩) 安山岩質岩石(安山岩・變朽安山岩)		〔Dw〕 〔Tw〕 〔Blb〕 〔btb〕 〔Ry〕 〔An〕	七ヶ岳溶結凝灰岩 滝ノ原溶結凝灰岩 矢竹沢層 矢竹沢層 大滝沢層 大滝沢層・矢竹沢層	新第三紀 鮮新世↘中新世
				古生層 古生層	
深成岩	花崗岩質岩石(黒雲母花崗岩)		〔Gr〕	貫入岩	中生代

これらは、七ヶ岳溶結凝灰岩 (D w) の分布する山地からつづく急傾斜の山腹斜面の下の山ろく部に堆積したもので、石英安山岩質溶結凝灰岩の大きささまざまな角礫からなる。また、七ヶ岳溶結凝灰岩の分布する山地の山頂にちかいたところに、小規模な湿原堆積物 (smp) が分布する。

2. 固結堆積物

粘板岩・チャート (S c)、硬砂岩 (G w) および石灰岩 (L s) からなる固結度の高い堆積物 (古生層) が、本図葉の南西部に分布する。粘板岩とチャートが優勢であれば硬砂岩と石灰岩のレンズをはさんでいる。石灰岩はすべて結晶質である。概略 N-S 方向の走行をとるが、急傾斜で構造は複雑で、不明確なところが多い。また、後でのべるように、花崗岩質岩石 (G r) との接しよく部には、いくつかの鉱床がつくられている。さらに、本図葉の南部には角礫岩 (T b) が、小範囲に分布するが、これは粘板岩・硬砂岩などからなる古生層が構造運動により圧砕されて角礫岩となったと考えられている。

本図葉の北西部から東部および南東部にかけては、新第三紀の比較的固結度の高い堆積物 (tscb と tsc1) が分布する。tscb は凝灰岩質砂岩・礫岩・凝灰角礫岩・凝灰岩よりなる堆積物 (鎌越沢層) で、tsc1 は凝灰岩質砂岩・礫岩・火山礫凝灰岩・細粒凝灰岩よりなる堆積物 (大滝沢層) で、ともに中新世に堆積したもので火山性の堆積物を多く狭在する特徴を示している。tscb・tsc1 は緑色化した凝灰岩をもち、グリーンタフの一部であることを示している。

本図葉の南西端の唐沢峠付近には、礫岩・粗粒砂岩・砂岩質泥岩からなる特異な性状の堆積物 (csm) が発達する。未淘汰の大小の角礫を多く含む礫岩が優勢であるところが多く、全体として固結度が低く、崩壊しやすい性質を示している。礫には、凝灰角礫岩や角礫岩などの btb などの堆積物中のものが多くみいだされるほか、魚のウロコの化石を含む硬質泥岩などがみられる。

八総付近の丘陵性の開析された山地には、礫岩・礫質砂岩・凝灰岩・砂岩と泥岩の落互層などからなる固結度の低い堆積物 (cstm) が盆状構造をつくって分布している。侵食に対する低抗性が小さく、cstm の分布地域では開析が進んだ谷がよく発達している。cstm は、檜沢川上流の小範囲に分布している。実際はより広い分布を示

していると推測されるが、詳細は不明である。

3. 火山性岩石

本図葉内では、未固結の火山性堆積物としては、泥石流堆積物 (c11) や上・中位の段丘堆積物 (gs1(1)・gs1(2)) をおおって発達する数mの厚さのローム層 (火山灰層) があるが、これらは分布発達上の特徴から未固結堆積物に含めてあつかわれている。

固結した火山性堆積物 (火山性岩石) は、広い範囲に分布し、いろいろな種類の岩石がみられる。七ヶ岳・黒岩山・高倉山などの高い山地 (1,200~1,600mの高度) 域をしめて石英安山岩質溶結凝灰岩 (Dw、七ヶ岳溶結凝灰岩) が分布する。これは針生図幅中の駒止峠層 (Dw) の延長である。この岩石からつくられる山地の山頂部はなだらかなところが多いが、山腹地は急傾斜を示すところが多い。本図葉の東部の萩野付近と中山峠西と滝ノ原とを結ぶNW—SE方向の細長い地域に、石英安山岩質溶結凝灰岩 (Tw、滝ノ原溶結凝灰岩) が分布する。岩質上、七ヶ岳溶結凝灰岩 (Dw) と近似するが、滝ノ原溶結凝灰岩はより珪化の程度が強く、固結度がよりすすんでいるところが多い。また、滝ノ原溶結凝灰岩は、tscl (大滝沢層) やtscb (鎌越沢層) などの中新世の堆積物と整合・調和的に分布するが、七ヶ岳溶結凝灰岩は前記の堆積物をすべて不整合におおっている。

本図葉北西部の小区域に玄武岩質溶岩や凝灰角礫岩 (Blb) が分布する。また、東部の各所には小規模に流紋岩質岩石 (Ry) が、西部の各所には小規模に安山岩質岩石 (An) が分布する。なかでも、八総の佐倉山付近では比較的規模の大きい安山岩質岩石が、突出した地形をつくって分布している。

火山性岩石のなかで、もっとも広い分布を示すのは凝灰角礫岩と角礫岩 (btb) である。古生層や花崗岩質岩石の周辺に分布し、浮石質凝灰岩などを狭在し、一般に緑色化しているほかに、珪化をうけているところが多い。

4. 深成岩

本図葉の西部と西南部のかなり広い範囲に、花崗岩質岩石 (黒雲母花崗岩、Gr) が分布している。Sc、Gw、Ls、Tbなどからなる古生層を貫入し、境界ちかくの古生層に接しよく変質をあたえている。また、btbやcstmなどの新第三系などにより不整合におおわれたり、これらと断層で接したりしている。花崗岩質岩石には、節理

の発達はかなりけんちよであるが、いちじるしい風化帯の発達はみられない。

5. 地質構造

本地域は、地質構成や構造上の特徴から、つぎにのべる2つの区域に大別される。

(1)北部から南東部にかけて、おもに新第三系の固結堆積物 (tscl、tscb) と火山性岩石 (btb、Tw) がNW～SEの走向で分布している地区。

(2)北西端から南西部にかけて、おもに古生代の固結堆積物 (Sc、Gw、Ls、Tb) とこれを貫入する花崗岩質岩石 (Gr) などの先第三系からなる地区。

(1)の地区の新第三系は、全体としてNW～SE方向の構造をとって分布するが、萩野付近の背斜状の構造や袋口付近の向斜状の構造がみられるなど、いくらか波曲している特徴を示している。(1)の地区の構造は、小林図幅や針生図幅に発達する新第三系の構造の延長にあたる。また、七ヶ岳溶結凝灰岩 (Dw)、tscb、Tw、tscl、btb などの新第三系 (中新統) を不整合におおって、高所を占めて分布しており、前記中新統の固結堆積物や火山性岩石と同じ構造は示していない。

(2)の地区の古生層はN～SからNNE～SSWの方向の走向で急傾斜を示すところが多いが、構造の詳細はあまり明らかでない。番屋から南東方にかけて発達する角礫岩は圧砕帯をあらわす構造性のもと考えられている。(2)の地区の湯ノ岐流域には、btbやcsmなどからなる新第三系が、ほぼN～S方向に長軸を有する堆積盆に発達している。この新第三系には、とくに角礫岩や角礫岩質の堆積物の発達が顕著であり、この新第三系の堆積が先第三系中に生じた断裂・陥没によって開始されたことを示している。このような新第三系 (btb) は番屋南にもみいだされる。

(1)の地区の新第三系と(2)の地区の先第三系との境界付近には、N～S・E～WおよびNW～SE・NE～SW方向の高角度の断層が多数発達する特徴を示している。これらの断層の多くは、新第三系の堆積開始時から堆積進行時中につくられたものであろう。また、(1)と(2)の地区の境界のなかの八総付近には、比較的固結度の弱いcstmの堆積物が、古生層・花崗岩質岩石・btb・Tw・tscl などからなるより古い時期に形成された岩層に、不調和的にとりかこまれて分布している。cstmには角礫質の堆積物や層間褶曲などが多くみとめられる。cstmの堆積物も陥没によって生じた小さな盆地に堆積したものと考えられる。この小盆地の北半部に、泥流堆積物 (c11) が

とくに顕著に発達している。

応 用 地 質

1. 地 下 水

大規模に取水・利用されているものはない。大川上流とその支谷、館岩川、湯ノ岐川・伊南川および檜沢川上流などの未固結堆積物中には、いくらかの滞水層が期待される。高杖原付近の未固結堆積物（泥流堆積物）や芳沢口西方の未固結堆積物からはいくらか取水・利用されているが、詳細はあきらかでない。

2. 温泉および鉱泉

湯ノ岐川や大川上流に、第2表に示すような温泉や鉱泉があるが、とくに湯ノ岐川河床から湧出する温泉は温度も高く、湯量も多く、広く知られている。

第2表 温泉・鉱泉

温泉名	所在地	源泉数	温度(°C)	泉 質	湧出状況
湯ノ花	館岩村湯ノ花	12	39—61	単純泉 { 一部石膏弱食塩泉 } { 含土類石膏弱食塩泉 }	自然湧出
滝ノ原	田島町滝ノ原	2	23、30	冷鉱泉および単純泉	〃
羽 塩	田島町糸沢	1	26.5	単 純 泉	〃

3. 鉱 床

本図葉中の古生層（Sc、Gw、Ls）と新第三系（btb、tscl）のなかには、かって稼行或は探鉱された鉱床が多数存在したが、現在はすべて休山又は閉山となっている。おもな鉱床は第3表に示したとおりである。

第3表 おもな鉱床

鉱山名	所在地	堆積物	鉱床等	鉱石等
八 総	田島町滝ノ原	tscl	黒鉱型・脈型	黄銅鉱・閃亜鉛鉱・方鉛鉱
伊南富	伊南村多々石	tscl	脈	銅・鉛・亜鉛鉱
湯ノ花	館岩村松戸原 北方	b tb	網状鉱染	黄鉄鉱・閃亜鉛鉱・黄銅鉱・方鉛鉱
湯ノ岐	館岩村水引南	Sc、Gw	脈	石英螢石
真 米	館岩村鱒沢	Sc、Gw	脈 （レンズ状） （パイプ状） （イモ状）	方鉛鉱・閃亜鉛鉱・硫化鉄鉱

以上のほか、湯ノ岐河流域に分布する古生層（とくに花崗岩質岩石との接しよく部）中には、探鉱或は稼行された鉱山がいくつかあるほか、鱒沢流域にも銅、鉛、亜鉛鉱の鉱脈が何ヶ所かで知られ、探鉱が行われたが、詳細は不明である。

本図葉中の古生層中には、結晶質の石灰岩（Ls）のレンズがかなり多数狭在されているが、これまで稼行されたことはない。

4. 地すべり・崩壊地

本地域内では、大規模な地すべりを生じているようなところはみいだされませんが、大小さまざまな規模で崩壊を生じたり、或はかつて生じたようなヶ所は多数みいだされる。つぎに、とくに注目すべき点についてのべておくことにする。

すでにのべたように、七ヶ岳溶結凝灰岩（Dw）の分布する高い山地の山ろくの谷部（檜沢川上流、大川上流から七ヶ岳方向に向う支谷、保城川などの流域）に、崖錐堆積物（cl）や土石流堆積物（cll）がかなり顕著に発達している。これらの分布する谷の下流部には、段丘堆積物（gs、gs(1)、gs(2)）や河床堆積物（sg）がよく発達する特徴を示している。以上のべた各谷を埋積する未固結堆積物は、条件によっては、2次的に土石流（泥流）として下流に押しだす危険性があるものといえる。七ヶ岳溶結凝灰岩の山地からの崩落がつづき、岩屑物の供給がつづく限り、土石流（泥流）の発生の可能性を持ちつづけていることになろう。

水引層 (csm) は、固結度が弱い未淘汰の礫岩を主とする性状をみても明らかなように、ずい所に崩壊を生じている。とくに、唐沢峠の道路の開発にともなって、大小の崩壊が発生している様子がみとめられる。

さらに、先第三系と新第三系の境界付近には、断層が多数発達しており、堆積物や岩石の性質や地形などのかかわりにおいて、しばしば崩壊を生じている。とくに、八総地区で顕著である。

以上のべた各地区に対しては、砂防指定が行われ、治山・治水施設がほどこされているが、今後とも十分に注意をはらっていく必要があるように考えられる。

参 考 文 献

- ・福島県 (1964) : 福島県鉱山誌、P. 1 — 296
- ・柴田豊吉・増田孝一郎・村田正文・石崎国熙・羽鳥晴文・佐々木郁郎・佐々木隆・田野久貴・中川義二郎・渡辺文武・伊藤希久夫・福島県地質調査報告 5 万分の 1 図幅「糸沢」、福島県、P. 1—36
- ・島田昷郎・伊沢寿昭 (1969) : 福島県地質調査報告 5 分の 1 図幅「只見」、福島県、P. 1—39
- ・鈴木敬治・真鍋健一・吉田義 (1980) : 5 万分ノ 1 「針生」図幅の表層地質、土地分類基本調査 5 万分の 1 「針生」図幅、P. 31—38、福島県
- ・通商産業省 (1970) : 昭和 44 年度広域調査報告書「西会津地域」、P. 1—31

(福島大学教育学部教授 鈴木敬治)

Ⅲ 土 壤 図

台地および低地の土壤

【黒ボク土】

表層に黒色又は黒褐色の腐植層をもつ火山灰土壤又は火山灰質の土壤である。腐植層の厚さは15～50cmであるが、50cm以下に埋没土層のあるところもある。腐植含量、礫層の有無および出現位置等により3土壤統群6土壤統に分類した。

(1) 黒ボク土壤

拍木原統：表層多腐植層（腐植含量10%以上）の粘質土で、腐植層の厚さは殆んどが25～50cmであるが、一部50cm以上もある。

腐植層の下は黄褐色の粘質又は強粘質土となっている。土地利用は畑である。館岩村高杖原、田島町糸沢などの段丘に分布する。

合川統：表層腐植層（腐植含量5～10%）の粘質土で、腐植層の厚さは殆んどが20～50cmであるが一部50cm以上のところもある。

腐植層の下は黄褐色の粘質又は強粘質土である。土地利用は畑である。田島町川島館岩村高杖原その他、段丘に分布する。

森戸統：表層腐植層の粘質土で、腐植層の厚さは20～40cmである。地表下35～50cm以下礫層または砂礫層となり有効土層がやや浅い。土地利用は畑である。田島町沼尻、館岩村岩下その他段丘に広範囲に分布している。

(2) 多湿黒ボク土壤

沢田統：表層腐植層の粘質土、腐植層の厚さは20～60cmであるが、地表下50cm以下に腐植層が埋没土層となっているところもある。土地利用は水田で土層中に酸化沈積物がみられる。館岩村塩ノ原、福渡その他の下位段丘に分布する。

落合統：表層腐植層の粘質土であるが、沢田統と異なる点は、地表下30～50cm以下に礫層又は砂礫層が出現することである。土地利用は水田で土層中に酸化沈積物がみられる。田島町山下山、館岩村岩下、塩ノ原その他下位段丘に分布する。

(3) 粗粒多湿黒ボク土壤

湯ノ花統：表層腐植層であるが、その厚さは15～20cmであり、地表下30cm以内より

礫又は砂礫層が出現し有効土層が浅い。土地利用は水田で酸化沈積物が僅かにみられる。田島町沼尻、館岩村湯ノ花その他の段丘に分布する。

【褐色森林土】

(1) 褐色森林土壌

黒褐ないし褐色の表層をもち、その下が黄褐色の次層となるのと、表層より黄褐色系の土壌とがある。下層礫層のところもある。

礫層の有無および出現位置、土性層序等により4つの土壌統に分類した。

高杖原統：大型機械により農地造成を行なった高杖原に分布する土壌で、かつて地表を覆っていた腐植層が開畑の際除かれて下層の黄褐色土が露出したところである。土性は表土は粘質が主であるが、下層土は強粘質が多い。土地利用は畑で牧草地となっている。館岩村高杖原の丘陵地及び段丘に分布する。

宮沢統：腐植層なく表土は暗褐又は褐色の壤質又は粘質土、下層は主として褐～黄褐色の壤質土となっている。館岩村精舎、前沢などの下位段丘に分布するが面積は少ない。

湯ノ岐統：腐植層なく表土は褐色の粘質土、次層は黄褐色の粘質又は強粘質土であるが、地表下50cm前後より礫層となり有効土層やや浅い。土地利用は畑である。田島町滝ノ原、館岩村角生など段丘に分布するが面積は少ない。

井桁統：表土は暗褐又は褐色の粘質土であるが、一般に礫含量多く、10～20cmより下層は礫層又は礫質土となっており有効土層が極めて浅い。土地利用は畑である。館岩村福渡、伊南村浜野その他、段丘に分布する。

【赤黄色土】

(1) 黄色土壌

八総統：農地造成を行なった高杖原地区に分布する土壌で、高杖原統と同じく地表を覆っていた腐植層が開畑の際除去されたところであるが、高杖原統と異なる点は地表下20～30cm以下礫層となることである。土地利用は水田であるが、現在は転換畑或は荒地となっている。館岩村高杖原に小面積分布する。

【褐色低地土】

(1) 粗粒褐色低地土壌

沢口統：表土、次層とも黄褐色の壤質又は粘質土であるが、地表下30cm以下60cm以内より礫層又は砂礫層となっている。土地利用は畑である。大川、館岩川、伊南川流域の谷底平野に分布するが面積は少ない。

【灰色低地土】

沖積低地に分布し、全層あるいはほぼ全層が灰褐色又は灰色を呈する土壌である。礫層の有無および出現位置により2土壌統群、3土壌統に分類した。

(1) 灰色低地土壌

和泉田統：表土、次層とも主として灰褐色の粘質土であるが、下層は主として壤質土、一部砂質土もある。土地利用は水田で酸化沈積物がある。館岩村熨斗戸その他の館岩川流域の谷底平野や下位段丘に分布する。

高野統：表土は灰褐色の粘質土、次層は灰褐又は灰色の粘質土が主である。地表下30cm～60cm以内より礫層又は砂礫層が出現する。土地利用は水田で酸化沈積物がある。大川、館岩川、伊南川流域の谷底平野に分布する。

(2) 粗粒灰色低地土壌

関本統：表土は主として灰褐色の粘質土であるが、壤質土もある。30cm以内より礫層または砂礫層が出現し有効土層が浅い。土地利用は水田で酸化沈積物がある。

大川、館岩川、伊南川流域の谷底平野に分布する。

【グライ土】

(1) 細粒グライ土壌

布沢統：表土、次層とも灰褐色の粘質土であるが、排水不良で地表下40m前後よりグライ層となっている。土地利用は水田で、伊南村宮沢に極少面積の分布である。

(福島県農業試験場農芸化学部長 鈴木平喜)

山地・丘陵地々域の土壤

1. 岩屑性土壤

七ヶ嶽山系、大嵐山々系、荒海山々系周縁部の急傾斜地に分布する崩壊性の土壤である。

一般に表層から角礫、半角礫に富み、有効土層は5 cm程度と浅い。基岩は25～30cm 附近から露出するが、これは雪による受蝕作用が伴ったものである。

なお、岩屑性土壤の一部には、残積性受蝕土、残積性未熟土をも含めてある。

2. 黒ボク土壤

高杖原開拓地を中心に、比較的傾斜のゆるやかな山麓地、原野に分布し、明度、彩度がともに10Y R、7.5Y R 2、またはそれ以下の黒色の表層をもつ土壤である。また阿賀川、館岩川、湯ノ岐川の各支流にも大・小にわたり出現しているが、そのいずれもが火山放出物を母材とするものと思われる。

(1) 糸沢Ⅱ統 (Itozawa-Ⅱ)

阿賀川、伊南の各支流沿いの山腹下部～山脚平坦面にかけて分布する黒色土壤である。

表層から角礫、半角礫を含むが、割合腐植に富み、A層上部に団粒状～塊状構造が認められる。土性は表層で壤土、下層で壤土～砂質壤土である。

(2) 八総Ⅱ統 (Yaso-Ⅱ)

高杖原開拓地を中心とした緩傾斜地に広く出現する黒色土壤で、一部は草地、畑に利用されている。

下層から半角礫が認められ、割合腐植に富む。A層上部に団粒状構造が認められるが、下層は特にない。土性は表層で微砂質壤土、下層で壤土～砂質壤土である。

3. 淡色黒ボク土壤

黒ボク土壤に比べ淡色（明度、採度ともに2以上）なA層をもち、B層との接点は判然としない。褐色森林土壤との間にも介在するが、多くは黒ボク土壤同様平坦な地形に、またはその上部に出現する。

(1) 糸沢Ⅰ統 (Itozawa-Ⅰ)

糸沢Ⅱ統の上部、大川の各支流および本谷開拓地の水田並びに畑に隣接している所

に出現している土壤である。

A層以下に半角礫を介在するが腐植は浅い。A層上部に団粒状構造を認めるが、B₁層以下に弱カベ状構造が認められる。土性は表層が壤土、下層が壤土～埴壤土である。

(2) 八総Ⅰ統 (Yaso-I)

八総Ⅱ統の上部に小面積に出現する土壤である。

下層に半角礫を含むが、割合腐植に富む。表層に団粒状構造が認められる。土性は微砂質壤土～砂質壤土である。

4. 乾性褐色森林土壤

山地の尾根、凸部および風衝地にみられる土壤で、褐色森林土壤のB_A・B_B・B_C型に相当するものである。

土層は一般に浅く、A層またはB層に細粒状、粒状および堅果状構造が発達し、菌糸を形成する。また比較的A₀層が厚く堆積するが、ポトゾル化の影響はない。

(1) 山王統 (San-no)

凝灰岩、花崗岩を主とする残積土で、尾根、山腹凸部の多くを占める土壤である。A₀層(L～F)を形成し、表層から半角礫を含む。腐植は乏しく、A層に粒状構造および菌糸が認められる。B₁層以下の土色は淡く、土性は壤土～砂質壤土である。

5. 適潤性褐色森林土壤

山腹上部～下部斜面にかけて広く出現する匍行土でB_D(d)・B_D型に相当する土壤である。

土層は50cm前後と割合深く、A層に団粒状構造、B層に塊状構造が認められる。乾性土壤と湿性土壤との中間に属するものである。

(1) 関本統 (Sekimoto)

山王統と母材をほぼ同じくする土壤で、山腹斜面に多く分布する。表層下部から角礫、半角礫を含む。腐植はA層で富むが、下層は乏しく層位も浅い。A層に団粒状構造が認められるが、下層は特にない。土性は壤土～砂質壤土である。

6. 湿性褐色森林土壤

山腹下部斜面、山脚部に出現する褐色森林土で、B_E・B_F型に相当する土壤であるが、図幅中のB_F型の土壤分布は少い。

腐植に富み、通気、通水ともに良好であり、生産性の高い土壤であるが、スギ人工林等ではしばしば雪害の影響を受けやすい。

(1) 湯ノ花統 (Yunohana)

山王、関本統と、母材をほぼ同じくする土壤で、それらの山脚部に小面積ながら分布する。

山脚部のため表層から半角礫を含むが、有効深度は70cmと深い。腐植は35cm内外まで富むが、それ以下も腐植を含む。A1層に団粒、A2～A-B層上部に塊状構造が発達している。土性は壤土～砂質壤土であり、良好な土壤である。しかし、地形位置によっては雪害により表土が受蝕されているところがある。

7. 暗色系褐色森林土壤

表層上部に黒褐色脂肪状のH層またはH-A層がみられ、A層は黒褐色、B層は暗褐色を帯びる土壤である。

この土壤は褐色森林土の分布域とポドゾルの分布域との中間に、ほぼ垂直成帯的な出現傾向にある。

(1) 戸板川統 (Toita)

針生開拓の南西部、戸板川の上流 1,300m附近から七ヶ嶽附近にかけて出現する土壤である。母材は石英安山岩質で下層に半角礫を認める。緩斜な位置に分布するためA0層が厚く、腐植も割合深くまで混入している。A層に粒状構造が認められる。土性は表層で埴壤土、下層で微砂質埴土である。

(2) 中山統 (Nakayama)

荒海山、土倉山の北部および大嵐山南部の比較的急傾斜地に分布する土壤である。

高海拔のため、H層が厚く、A層は割合腐植に富むが、40～50cm附近に基岩がみられる。A層に粒状構造が認められる。土性は微砂質埴土である。

8. 乾性ポドゾル化土壤

山頂、尾根筋および凸型斜面等乾燥の影響をうけやすい標高 1,100m附近からの地形に生成される土壤で、B_D III型が主である。一般にA₀層が厚く、はっきりした灰白色の溶脱層は認め難いが、集積層は認められる。40cm附近からpumiceの層が認められる。

(1) 荒海統 (Arakai)

七ヶ嶽、大嵐山、土倉山等の標高の高い凸型斜面に多くみられ、A₀層は厚く、特に(F)―H層が堆積している。角礫、半角礫はほとんどなく、腐植に富む。全体に土色は濃く、A₁層に粒状構造が、Pumice層に鉄の集積が認められる。土性は埴質壤土である。

9. 高位泥炭

沼の平、黒岩湿原の2ヶ所に点的に分布している。常に滞在する地形なので、ミズゴケ等の遺体の分解が進まず、これらが厚く堆積してできた有機質のものである。

(1) 駒止統 (Komado)

沼の平に出現する高位泥炭でミズゴケを主とする。

全層は80～100cmと深い。P₀、P₁層はまだ分解が進んでおらず、本格的な泥炭層といえるのはP₃～P₄層だけで、P₂層の泥炭化は余り進んでいない。石礫はなく、腐植は下部まで富む。土性は軽埴土である。

参 考 文 献

- 1 国有林適地適木調査 1971 福島県農地林務部
- 2 林野土壌の分類 1975 林業試験研究報告第280号)
- 3 山口事業区の土壌 1979 前橋営林局

(福島県林業試験場研究員 今井 辰雄)

IV 傾斜区分図

図葉を縦・横それぞれ40等分した方眼について、各方眼内の地表傾斜をもっともよく代表する斜面の傾斜を、地形図上の等高線開隔の計測から求めて図化したものである。5万分の1地形図のほかに、2.5万分の1地形図「松戸原」、「糸沢」、「湯ノ岐」、「荒海山」、ならびに2万分の1および1.5万分の1空中写真も適宜併用し、計測結果の確認・補正を現地調査によって行なった。

図葉域の傾斜分布を概観すると、阿賀川と伊南川・館岩川の流路沿いに平坦な部分ほぼ中央の高杖原から北の地域に緩傾斜の部分があるほかは、大半が傾斜 20° 以上の急斜面となっている。以下地形地域ごとに傾斜分布の特色を述べる。

A 分水山地 (Ia~Id)

4つの地形地域で傾斜分布は少しずつ様子が異なる。 40° 以上の急傾斜部と、 30° 以上 40° 未満および 20° 以上 30° 未満の斜面がモザイク状に組み合わさって全体としてかなり急傾斜を示すのが荒海山地 Id であるのに対して、七ヶ岳山地 Ic では、約5kmにわたって直線状に連なる主稜線を軸として 40° 以上、 30° 以上、 20° 以上の斜面が外側に向って平行かつ対称的に配列している。従って Id では、主稜線に直交する方向に地形断面を描けば、主稜線のところをピークとして両側に上に凹の曲線が現われるはずである。地形分類図でも、稜線から下方へ、崖—急斜面—中起伏山地—土石流地形というように（性質はそれぞれ異なるが）次第に傾斜のゆるい地形要素が帯状に並んでいるのが読みとれる。

一方、黒岩山地 Ia と牛首・真名板倉山地 Ib ではそれらとも違って、山頂付近に 20° 未満、ところによっては 8° 未満の緩傾斜部がかなり広く分布し、山脈から山麓にかけて 30° 以上の急斜面がそれを取り囲むようにひろがっている。地形断面は従って上に凸形となり、なお侵蝕の若い時期に属していることがわかる。しかし、Ia と Ib とでもやはり若干の相違を認めないわけには行かない。すなわち、Ia では、石英安山岩質溶結凝灰岩台地のほとんど flat な部分と、その周囲を縁どる急斜面部とが相接するところが多く、ひとつひとつの平坦ないし緩傾斜部分が平均約 0.3km^2 とかなり広いだけに、緩急の contrast が著しい。これに対して Ib では、それぞれの平坦面のひろ

がりが狭小なため、傾斜区分として独立の緩斜面区域とはなり得ず、周縁の急斜面を含んだ 20° 以上 30° 未満の階級として示されているところが多い。

B 伊南川・館岩川流域（Ⅱ、Ⅲa～Ⅲe）

まず、高杖原台地Ⅱには、本図葉域内でひとつの区分のものがまとまって分布する例としては最も広いのがみられる。山麓緩斜面・丘陵地・土石流段丘・砂礫段丘のほぼすべてにまたがって、傾斜 3° 以上 8° 未満のところひろがっているのである。もちろん、緩傾斜地とは言っても、谷底平野や火山山麓のように、起伏の少ないひと続きの地形面がひろがるのではなくて、形成時期、成因をそれぞれ少しずつ異にするいくつかの地形面が集まっているのであり、傾斜区分のための計測にはかからない小規模な崖や平坦地も随所に含まれている。しかしながら、全般的に山地がひろがる中で、緩傾斜部が（とくに谷底に近い低位置に）これほど広く存在するのは土地利用等の上からも極めて貴重である。

高杖原台地を除く館岩川流域の他の部分についても、いくつかの特徴があげられる。

館岩川上・中流域Ⅲaで目立つのは、高杖原周辺部で 15° 未満のやや緩やかな部分が多いこと（山腹緩斜面などに相当する）、左岸伊与戸川沿いに一部 3° 未満の平坦地（同じく山腹緩斜面）があって高杖原のいわば下流側の分布限界を示すこと、松戸原から下流では谷壁斜面に 40° 以上の急傾斜部が多くなることの3点である。番屋川流域Ⅲbと湯ノ岐川流域Ⅲdはよく類似していて、谷底に下位段丘の発達する部分は 3° 以下の平坦地、谷壁斜面は上流部で 40° 以上のところが多くなるほかはほぼ 30° 以上 40° 未満で占められている。

鱒沢川流域Ⅲcのみは極めて特徴的で、館岩川への合流点から最上流部まで一貫して 40° 以上の急斜面が圧倒的に広い。大嵐山（1,635.4m）、安ヶ森山（1,353.9m）土倉山（1,559.8m）などが深く刻まれる大起伏山地ならではの景観である。

伊南川流域Ⅲeは、阿賀川流域下流部と同様に、図葉内に谷底平野のひろがる例外的なところであることのほかに、支谷沿いにも 15° 未満の緩斜面が広く分布するのが特色である。

C 阿賀川流域

荒海川流域Ⅲfでは、その最上流部および右岸流域に 40° 以上の急斜面が集中し七

ヶ岳東麓に当る左岸では標高が下るに従って傾斜もゆるくなる傾向が認められる。檜
沢川流域Ⅲgも、基本的にはⅢf左岸地域と同様の傾斜分布をその特色としている

(福島大学教育学部教授 中村嘉男)

V 水系・谷密度図

図葉内の本県域は、大きくは阿賀川（阿賀野川）流域に属し、県境の分水界以南は利根川水系の鬼怒川流域に属する。本県内についてみれば、ほぼ図葉中央を南北に走る標高 1,100～1,600の分水界によって、東側の阿賀川（大川、とくに上流部は荒海川）と西側の只見川（支流伊南川、その上流右岸の支流館岩川）の両流域に分けられる。低地の極めて狭い本図葉内では、水系図はそのまま谷地形分布図に等しくなり、図葉内各地区での河谷地形の発達状況をかなり正確に示しているものとみてよい。以下、地形分類図における各地形地域ごとに水系および谷密度の特色をみる。

(1) 水系図

A 分水山地（Ia～Id） 牛首・真名板倉山地Ibと荒海山地Idとにみごとな放射状水系網がみられる。平坦面が山頂部に残る真名板倉山を除き、牛首山から東北東にのびる標高 1,100～1,200mの山稜に対しては、その直下までV字谷群が食い込んでおり、早壮年期的な侵蝕景観を呈している。荒海山地の中央に位置する荒海山から西・北・東に放射状に流下する河谷はいずれも樹枝状の支谷群を伴い、1 km²あたりの起伏量 400mをこえる大起伏山地をつくり出している。

黒岩山地Iaおよび七ヶ岳山地Icにおいては、これに対して水系の発達が極めて乏しく、全体として幼年期の特色をみせている。黒岩山を中心にひろがる石英安山岩質溶結凝灰岩の台地にはほとんど谷の刻み込みがみられない。台地面自体は、かつてはるかに広大なもの（現に「針生」図幅中の駒止高原のような）であったであろうが、それが現在のように限られたところのみ残されるに至った過程では、河谷による侵蝕よりも、崩壊などによる斜面後退（すなわち台地面の縮小・消失）が主役として働いていたのではないかと思われる。

もうひとつ、この地域に水系発達の乏しいのは、土石流堆積面上に谷の生成が少ないことにもよるのであって、そこでは地表水はすみやかに地下に滲透してしまい、地表を削って谷をつくる確率が低いという条件がある。

B 伊南川・館岩川流域（II、IIIa～IIIe）

高杖原台地IIでは、盆地状の地形構造を反映して周辺山地斜面から高杖原の中心部

へ向けての求心的水系網がみられる。台地南西縁の熨斗戸^{のしと}付近に集まった水系は1本の幹となって西に向う。一方、周辺山地を谷のうち規模の小さなものは、高杖原台地の土石流段丘面や砂礫段丘面に達したところで消滅するが多い。これは、谷に刻まれた山地斜面の下部が段丘面によって不連続的に切られた関係を示すものと言えよう。この関係は、館岩川上・中流域Ⅲa以下伊南川流域Ⅲeまでばかりでなく、阿賀川流域の段丘地形発達地域にも共通して認められる。山地斜面を開析する谷でも規模が大きいものは段丘面上に延長川をつくり、下刻して段丘面をも刻むので水系は本流にまで連続することになる。

館岩川左岸支流伊与戸川沿いの山腹緩斜面（860～900m）についても同じ現象が認められる。南側にある急斜面を開析する9本の小谷は、緩斜面上に谷をつくることができず、これらと全く別個に緩斜面上に生じた数本の谷が、緩斜面外縁の急斜面を開析しつつ館岩川沿いの下位段丘面に達すると、これもまた谷形をそこで消滅させているのである。

樹枝状のパターンが最もよく発達しているのは鱒沢川流域Ⅲcで、大起伏山地、40°以上の急傾斜地とほぼ一致する。なお、湯ノ岐川・鱒沢川・番屋川などの、館岩川の主要支流のほか、矢竹沢・滝岐川・伊与戸川・前沢入沢なども含めて、いずれも南北方向の直線状の谷をつくっており、この地域の地質構造に従った適延谷の特色をみせている。

C 阿賀川流域

荒海川流域Ⅲfでは、荒海川を太い幹として左右両岸にほぼ一様に樹枝状水系網が発達している。ここでも、程窪沢・鎌越沢などの土石流地形の分布するところには特異な水系がみられる。

檜沢川流域Ⅲgには針生方面に集水する求心的水系が発達するが、なお全体として侵蝕輪廻の比較的初期の段階にあることがうかがえる。

(2) 谷密度図

水系のパターンにみられる特色を、数量的に対応させてみようとするとき、谷密度との照合が必要となる。鱒沢川流域や湯ノ岐川左岸地域などでの谷密度が30～40程度（一部に50を数えるところもある）であり、樹枝状水系が適度に発達する阿賀川流域

上流部で25～30程度、高杖原周辺部や檜沢川流域などの土石流堆積地域は15～20程度と、それぞれ特徴的な対応が認められる。また、低地あるいは台地面のひろがる地域以外で谷密度10未満のところは、山頂・山腹に緩斜面が分布する地域にしばしば認められる。

(福島大学教育学部教授 中村嘉男)

VI 土壤生産力区分図

台地および低地

畑は段丘地、台地、山麓地に分布し、黒ボク土壌最も多く、次いで褐色森林土壌であり、沖積低地の土壌である褐色低地土壌は少ない。

黒ボク土壌のうち、柏木原統、合川統は化学的性質稍劣りⅡ等級、森戸統は化学性やや劣り、有効土層の深さ50cm前後でやや浅くⅡ等級である。

褐色森林土壌のうち高杖原統は農地造成により畑地化したところで、化学性劣り、また下層土ち密で物理性も劣りⅢ等級。宮沢統は下層壤質土で過干のおそれあり、また化学性やや劣りⅡ等級。湯ノ岐統、井桁統は有効土層浅くⅢ等級である。

粗粒褐色低地土壌の沢口統は有効土層浅く、過干のおそれが多くⅢ等級である。水田は大川、館岩川、伊南川流域の低地や段丘に主として分布するが、一部台地にもある。

灰色低地土（灰色低地土壌、粗粒灰色低地土壌）が最も多く、次いで多湿黒ボク土（多湿黒ボク土壌、粗粒多湿黒ボク土壌）であり、黄土色壤やグライ土壌は極少面積である。

灰色低地土壌のうち和泉田統は当団幅の水田土壌としては生産力的に高い方ではあるが、化学的性質からみてⅡ等級に属する。高野統は礫層があつて有効土層50cm以内であるからⅡ等級であり、粗粒灰色低地土壌の関本統は30cm以内に礫層があつて有効土層浅くⅢ等級である。

多湿黒ボク土壌の沢田統、落合統は化学的性質やや劣りⅡ等級であり、粗粒多湿黒ボク土壌の湯ノ花統は30cm以内に礫層があつて有効土層浅くⅢ等級である。

黄土色壤の八総統も有効土層浅くⅢ等級である。

細粒グライ土壌の布沢統は土壌の還元化が強く水稻の根系障害のおそれが多いのでⅢ等級である。

(福島県農業試験場農芸化学部長 鈴木平喜)

【山地および丘陵地】

山地の土壌は地形、地質、気候、標高および植生等の因子の組合せにより異なることは云うまでもない。

しかし、厳密にはひとつの土壌統の間にも上下差があるので、ここでは出現土壌により類別した統毎に一つの級位とした。

岩層性土壌は比較的高海拔の山地に出現するが、表層を欠き、また腐植に乏しく、生産力に欠陥をきたすのでⅣ～Ⅴ等級である。この地への造林は望めなく、また、造林しても経済林となるには無理を生じる。

糸沢Ⅱ統および八総Ⅱ統（黒ボク土壌）は表層から腐植に富み、有効土層も深く、林木の生産力も中庸であるためⅡ等級である。

糸沢Ⅰ統および八総Ⅰ統（淡色黒ボク土壌）は黒ボク土壌より腐植に乏しく、有効土層も40cmと浅い。このため林木の生産力もやや劣り、Ⅲ等級である。

山王統（乾性褐色森林土壌）は斜面上部、凸型地形に出現するため、表層が10～15と浅く、腐植も少ないため林木の生産力が劣りⅢ等級である。

関本統（適潤性褐色森林土壌）は山腹中～下部に多く出現するため、有効土層も割合深く、林木の生育も比較的良好でありⅡ等級である。しかし、岩層性土壌、ポドゾル化土壌と隣接するところでは級位は下る。

湯ノ花統（湿性褐色森林土壌）は斜面下部の崩積面に堆積したもので透水・通気および養分の循環が良好で、林木の生産力が高くⅠ等級である。しかし地形位置によっては造林木への雪害が懸念される。

戸板川統、中山統（暗色系褐色森林土壌）は通常褐色森林土壌の上部に出現するが高海拔のため腐植の分解が遅く、このため林木の生産力はやや劣りⅢ等級である。

荒海統（乾性ポドゾル化土壌）は寒冷偏湿気候下にあるため、A₀層の分解が遅くまたA層からの溶脱がおこるので林木の生産力は低く、Ⅳ等級である。この地への人工造林はむづかしい。

駒止統（高位泥炭）は水分が飽和状態にあり、腐植の分解程度もきわめて遅く、しかも造林木の健全な根の発育も不良となるため生産力はⅣ等級である。

以上が林野土壌の生産区分であるが、一般的には斜面上部、峰筋等では乾性な土壌が多く出現し、林木の生産力も低い判定となる。

また、斜面下部の匍行・崩積面等では適潤な土壌が形成されやすく、林木の生産力も高い判定となっている。

一方、黒色土壌類と褐色森林土壌類の林木の生育はそれ程変わらないと思うが、養分含量等の問題から褐色森林土壌類よりやや下位となるべきであろう。

(福島県林業試験場研究員 今井 辰雄)

Ⅶ 土地利用現況図

1. 耕 地

(1) 概 要

本図葉東部に阿賀川上流大川があり、その上流に荒海川がある。また、図葉西部には只見川に合流する伊南川、その上流である館岩川、湯ノ岐川がある。

この地方には急峻な山が多く、北の方から高倉山(1,203m) 下嶽(1,509m) 七ヶ嶽(1,635m) 門倉山(1,264m) 真名板倉山(1,338m) 荒海山(1,580m) 土倉山(1,559m) 大嵐山(1,635m) 安ヶ森山(1,353m) などがある。

耕地は、田、畑、果樹園、樹園地等が全体の約 8.7%、林地が約89.6%、都市及び村落地在約 0.3%、その他が約 1.4%を占めている。

土地利用状況は、大川、荒海川、伊南川、館岩川、湯ノ岐川に沿った地域に水田がありその一段高いところに普通畑がある。高杖原などの丘陵地に牧草畑、普通畑、荒海に果樹園などがある。その他は林地である。

主要作物は米である。その他作付量は少ないが、大豆、たばこ、小豆、桑、ばれいしょ、大根、トマト、ソバ、リンドウなどが作られている。果樹はリンゴが田島町の荒海地区で生産されている。林産物としては、シイタケ、ナメコの生産がさかんである。この地方の山林には自然のぜんまい、わらびなどの山菜類、マイタケ、キクラゲシメジ等きのこ類が豊富である。

(2) 田

大川、荒海川、伊南川、湯ノ岐川、館岩川沿岸、高杖原等に水田が分布し、耕地面積の約76%を占めている。ほとんどがほ場整備が完了しており乾田になっている。主なほ場整備地区は、田島町藤生地区53.7ha、古今地区45.5ha、館岩村湯ノ岐地区10.8ha等であり、90%以上の地区が完了している。伊南川沿岸では、休耕田にトマトが作付され、「南郷トマト」として出荷されている。

(3) 普 通 畑

畑は、大川沿岸の田島町荒海、滝ノ原、伊南川沿岸の宮沢、浜野、館岩川と湯ノ岐川の合流点である松戸原、高杖原の丘陵地及び八総部落周辺に多い。これらの畑では

大豆、小豆、ばれいしょ、たばこ、リンドウ、ソバ、大根、野菜類等が作付されているとくに高杖原は昭和28年より29戸の入植者の手によって約70haの開拓が行われたところである。畑は、高杖原部落周辺に多い。伊南村浜野地区の伊南川沿岸の原野を現在畑地として造成している。

(4) 桑 園

田島町荒海、川島、関本、糸沢、館岩村高杖原、八総、松戸原、伊南村浜野等で養蚕を営んでいる農家があるが、田島町の旧荒海村で13ha、館岩村14ha、伊南村20ha（1975農業センサス）ほどの桑園がある。山間地に多いため、原野になっているところも見られ、桑の収量は減ってきている。

(5) 果 樹 園

田島町川島地区の国道 121号線の東側にリンゴ畑があるが、手入れされていないところが多くみられる。同町荒海地区の山手の方にも、リンゴ畑が多い。この地区は、標高が高く寒冷地なのでリンゴの日持ちが良く味も良い。観光リンゴ園を開いている農家もある。

2. 都市及び村落

国道 121号線沿い及び伊南川、館岩川、湯ノ岐川沿岸に村落が集中している。この図葉内には大規模な工場はない。主な工場としては、田島町に福島セコニック田島工場、徳力精工株式会社田島事業所、丸新紡績株式会社、館岩村にパレル株式会社（縫製）等がある。その他は、山菜の加工場があり、カンヅメ、ビンヅメを作り販売している。製材所及びチップ工場が田島町、館岩村にある。

3. 林 地

本図葉内の約89.6%が林地であり、そのうち約65%が民有林でその他が国有林及び公有林である。樹種は天然林については広葉樹林が大部分を占め、ブナ、ナラなどが多い。針葉樹は、田島町、伊南村の山地の屋根の部分に線状にアカマツが自生しており、この地図上には混交林として表わしてあるが、そのうちの比較的広範囲に雑木の中に自生している場所を示している。ほとんど地図上では表わせない程度のものである。

本図葉内は会津地域大規模林業圏開発計画区域になっており、大規模な造林が行わ

れている。樹種は、田島町、伊南村の比較的標高の低い地域では杉が主であり、田島町の標高の高い地域及び館岩村では、カラマツが主で館岩村水引地区周辺でアカマツの造林地がみられる。林道の新設、整備等により、昭和30年代より急速に造林が進み年々人工林の割合が高くなっている。保安林は、水源かん養保安林が大部分を占めている。

4. 草 地

館岩村に白樺牧場があり、牧草畑、採草地含めて 150haある。この牧場では肉牛の肥育を行っている。伊南村には、多々石峠の北部に採草地がある。

(福島県農地林務部農地計画主事 高橋勝雄)

1981年3月印刷発行

会津開発地域
土地分類基本調査

糸 沢

編集発行 福島県農地林務部農地計画課
福島市杉妻町2-16

印刷 阿喜印刷所
福島県伊達郡伊達町字雪車町15-7